

浜田市立石見幼稚園（令和3年度 県指定）

【研究主題】

「仲間とつながり合う幼児の育成」 ～互いの思いを出し合える集いの場を通して～

I 研究の経緯

本園では令和元年度より、「仲間とつながり合う幼児の育成」を主題に掲げ研究に取り組んできた。令和元年度は、副主題を～協同的な活動の環境と援助について考える～、令和2年度は、～協同的な活動を生み出す環境構成について考える～として研究を進めてきた。

今年度より副主題を～互いの思いを出し合える集いの場を通して～とし、人権教育に重点を置くことで、主題にせまりたい。

II 主題設定の理由

今年度は、年少児4名の入園があったが転勤等で年中児の在籍はなく、年長児11名と年少児4名の学級編成となっている。（年長児は進級当初14名、1学期中に3名転出）

本園の園児は明るく元気な幼児が多く、積極的に戸外に出て遊んだり、いろいろな遊びに興味をもって関わろうとしたりする。友達の遊びや行動にも敏感で、さまざまな遊びが展開されている。また、友達の感情の動きにもさまざまな言葉をかけながら寄り添う姿が見られる。しかし、友達はみな自分と同じ気持ちであると思っていたり、友達の考えを受け入れられず、一方的な遊び方になってしまったりする姿が見られる。遊びの最中にトラブルになると、自分達で解決しようとする姿は見られるが、自分の気持ちを伝えきれない幼児もいる。

このような現状から、本園の園児には、「友達と話し合ったり協力したりしながら、園での遊びや活動に夢中になって取り組む楽しさを味わうこと」、「安心して自己を発揮できる仲間関係を築き、仲間と協同して活動する経験」が必要であることから、本主題を設定した。また、これらの経験は、小学校以降の生活の基盤となることも期待できると考えている。

III 主題の受けとめ

「仲間」とは

- 生活を共にし、関わりを強くもつ 友達・集団
- 周りの大人も含めた、幼稚園で一緒に生活する集団

「つながり合う」とは

- 自分とは違う個性をもった友達がいることに気づき、互いに関わり合うこと
- 友達と一緒に過ごすことに心地よさを感じ、自己を素直に表現しながら友達と関わること

「仲間とつながり合う幼児」とは（幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿で捉えると）

- ◎友達と過ごすことに心地よさやうれしさを感じる幼児（①④）
- ◎気持ちや考えを伝え合える幼児（⑨⑩③⑦）
- ◎共通の目的の実現に向かって友達と一緒に取り組もうとする幼児（②③⑥⑨⑩⑦⑧）
- ◎互いのよさに気づき、認め合える幼児（①③④⑨⑤）

幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿

- ①健康な心と体 ②自立心 ③協同性 ④道徳性・規範意識の芽生え ⑤社会生活との関わり
- ⑥思考力の芽生え ⑦自然との関わり・生命尊重 ⑧数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚
- ⑨言葉による伝え合い ⑩豊かな感性と表現

※（ ）内の10の姿は関連の高い順に配列

IV 副主題について

前年度から朝の会や帰りの会で、幼児が自発的に自分の思いを伝えようとする姿が増えてきた。また、友達の思いを聞き、幼児同士が一緒になって考え合う姿も見られている。そこで、集いの場に焦点を当て、子どもたちが集いの場で自分の思いを表現していくことで、『仲間とつながり合う幼児』にせまることができるのではないかと考えた。また、さまざまな人の気持ちを知り、多様性を受け入れていくことも本主題に掲げた幼児の姿にせまることができるのではないかと考え、副主題を設定した。

V 研究の目標

幼児の実態を把握し、「互いの思いを出し合える集いの場」の教師の援助や環境構成を考え、工夫することで、仲間とつながり合う幼児を育成する。

VI 研究の見通し

幼児同士が友達のさまざまな気持ちに気づき、一緒に考えていくことができるような援助や、場作りを工夫していくことで、研究主題に掲げる幼児の育成を図ることができるであろう。

VII 研究の内容と方法

内 容	方 法
集いの場の教師の援助の在り方や環境構成を追究する。	① エピソード記録を取り、事例研究を行い検証する。また、幼児の変化や今後の遊びの展開についても協議・考察し、実際の保育につなげていく。 ② 幼児が集う活動や終わりの会の工夫を記録し、事例研究を行い検証する。効果的な環境や工夫は継続したり、見直したりしながら実際の保育につなげていく。 ・場に応じたメンバー構成の工夫。(異年齢の関わり) ・新しい教材の持ち込み。等

VIII 人権教育との関連

今年度、人権教育実践モデル園の指定を受け、研究とあわせ以下のような取り組みを行っている。

- ・ P T A意識調査（家庭での子どもへの関わり方についてのアンケート）の実施と分析
- ・ 学期末の園評価による保護者アンケートの実施
- ・ 参観、行事後の保護者感想の実施（感想、幼児に向けてのメッセージカード）
- ・ 職員研修（講師を招いての研修）



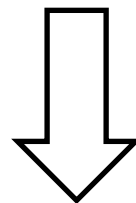
IX 実際の取り組み（方法①②から事例の抜粋）

方法①より 事例『遊びの中で困り感を伝え合う事例』（5歳児 きく組）

これまでの幼児の様子

毎日のように“逃走中”（鬼ごっこ）の遊びを繰り返していた。遊びに慣れ親しむにつれ、自分達でルールを考え、話し合いながら進めようとする気持ちが強くなっていた。

A児…遊びに対するアイデアがたくさん出る。しかし、楽しくなってくると自分の気持ちを優先しがちで、友達の気持ちに気づきにくくなる。また、友達に指摘されると素直に受けとめることができず、その場から離れようとすることが多い。



エピソード（仲間とつながり合うための教師の援助） 【7月5日（月）】

雨天のため、遊戯室で10人の幼児が“逃走中”をしていた。**A児**がルールを発信し、そのルールを全員が喜んで受け入れている様子が見られた。**T**は、応援したり、ルールを尋ねたりしながら遊びを見守っていた。

1時間を過ぎると、**A児**が自分本位のルールを提案するようになっていった。すると、他の幼児達が「そのルールおかしくない?」「なんのためにこのルールがあるの?」と口々に言い始めた。**A児**は気づいているが気にせず遊び、だんだんと周りの幼児の不満が大きくなった。すると、自分達で声をかけ、集まって話し合おうとした。**A児**はその雰囲気が嫌で、ふざけたり友達からの言葉を避けたりしていた。すると、他の幼児はだんだんと話を聞いてくれないことへの注意が目的になり、本来の話し合いの目的がずれていった。**A児**がふざけてその場を逃げ出すと、全員が追いかけていったが、**A児**は追いかけてもらうことを喜んでいた。**T**は本当に話し合いたい内容から気持ちが逸れていかなないように、全体に呼びかけ続けた。

その後、徐々に**A児**への声かけが「一緒に話そうよ。」「解決しよう。」という声かけに変わっていった。しかし、**A児**自身が聞き入れる様子がなく、**B児**に手を掴まれた時にパンチをしてしまったことで、再び遊戯室に全員で座り込んでの話し合いになった。他の幼児は「話をしてくれないと気持ちがわかんないよ。」「わからなくて一緒に遊べなくなっちゃうよ。」などと、優しく声をかけていた。

A児は**T**や友達からの声かけで、時間をかけて謝ることができた。しかし、初めに幼児達が感じた疑問への解決とはならなかった。

考察

- ・話を聞こうとする姿勢から、相手の気持ちを大切にしようとする姿が感じられた。
- ・幼児が諦めずに友達と向き合っていこうとする姿は、今まで積み重ねてきた話し合いによる成功体験がもととなっていると考える。また、年長児はこれまでの経験から、自分達の力で話し合いを進めていこうとするため、教師は見守ったり、簡潔にアドバイスを伝えたりする援助が重要であると考えられる。
- ・自分達で話し合いをすることが定着してきた年長児に対して、話し合っている姿を認めていくことの重要性がわかった。話し合いの結果、解決しなかったとしても、幼児同士が気持ちを聞き合ったり、互いのことを思い合ったりする場を大事にし、認めていきたい。

方法②より 事例 『運動会の競技に向かう幼児の姿と変化』（5歳児 きく組）

クラス全員で話し合う場面などでは、年長児として責任感をもって話し合う姿が見られていた。また、一人の考えで話し合いが進むのではなく、一人一人に確認を取りながらみんなで話し合おうとする雰囲気があった。しかし、好きな遊びになると発言力の強い幼児の考えで遊びが進む様子が見られるようになった。また、帰りの会などの集いの場では、発言の回数や話題への関心度には個人差が見られ、発言する幼児にやや偏りが見られるようになってきた。そこで、発言力の強い[C児]の姿を中心に追いながら、教師の意図的な環境構成や援助を探ることにした。



<教師の願い>

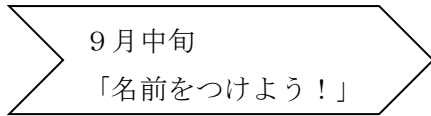
年長児全体：さまざまな気持ちや考え方があことを知り、自分なりに気持ちを寄せ、関わろうとするようになってほしい。

[C児]：友達から大切にされていると感じることで、友達を思いやる気持ちが高まり、自分自身の態度や発言に立ち止まるようになってほしい。

運動会に向けて取り組む中で、5・6人の小グループで話し合うことのできる競技を意図的に提案する。グループの中で気持ちを伝え合うことにより、互いの気持ちや考えを知り、思いやりの気持ちが高まることを願った。また、一人一人が自分の気持ちを伝えることができるように援助することで、安心して発言する経験を重ねてほしいと願い、支えていくことにした。



<運動会に向けての取り組みの実際>



幼児の姿（10の姿）	援助・環境構成	教師の気づき
<p>9月14日 帰りの会</p> <p>運動会の競技名について、帰りの会で話し合う。どんな競技をするのかわくわくしている様子を見せ、真剣に話を聞こうとする。 (①②)</p> <p>それぞれの幼児が思いついた競技名を発言する。すぐに“つむつむ”というキーワードの言葉が出て、「それいいね！」等の共感の言葉がたくさん出る。(⑥⑨⑩)</p> <p>教師から「つむつむだけだと何のことかわからない人もいるかもね。」と投げかける。C児が、「東京タワーみたいじゃない？」と言うと、周りの幼児は、「じゃあ、つむつむタワーだ！」と、うれしそうに共感し合う。(⑤⑨⑩)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ホワイトボードに図を描いて説明することで、理解できるようにする。 ・一人一人と視線を合わせ、話に集中できているか確認しながら、丁寧に競技内容を説明する。 ・競技への期待感が増すように、楽しい雰囲気をつくり、話をする。 ・幼児から競技名のアイデアが出てくるように促し、教師からも簡単な名前を提案する。 ・幼児一人一人のアイデアに共感することで、安心して発言できる雰囲気づくりをする。 ・運動会に来てくれる人の気持ちになって考えることができるように声をかける。 ・もう一度、ホワイトボードに箱を積み上げた絵を描き、“タワー”のイメージを共通理解できるようにする。 ・自分達力で競技名を決めたことを認め、自信につなげる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・絵に描いて伝えることで、話し合いへの集中が高まっていた。 ・幼稚園生活最後の運動会に向けて、期待感をもって取り組む姿が見られた。 ・普段から発言の多い幼児の意見が目立っていた。 ・アイデアの発言がない幼児はいるものの、全員が相づちを打ち、共感の言葉を発していた。 ・周りの人の気持ちを考えるように投げかけると、相手の立場になって気持ちを想像しようとする姿勢が見られた。 ・教師から多くは発言せず、見守ったり必要な時には一言投げかけたりすることで、自分達力で話し合う姿が見られた。

9月中旬

「つむつむ楽しい！」

幼児の姿（10の姿）	援助・環境構成	教師の気づき
<p>9月15日 クラス活動</p> <p>遊戯室に集まり、運動会のチームにわかれて初めて“つむつむタワー”に取り組む。たくさんの箱や段ボールを見て、「これを使うの?」「早くやりたい。」と、期待感を膨らませる。(①②)</p> <p>チームにわかれて思い思いに箱を積んでみる。自然と幼児同士が会話をし、どうすれば高く積めるのかを考え始める。(③⑥⑧⑨)</p> <p><u>C児</u>がタワーをより高くしようと、重ねた椅子の上に立とうとしていた。教師が、「危なそうだね。」と一言声をかけると、<u>D児</u>がすぐに椅子を支えに行った。それを見ていた周りの幼児も友達が椅子に上がった時には椅子を支え、声をかけ始める。椅子の支え合いを繰り返していると、だんだんと<u>C児</u>が「Bくんはどうしたい?」「みんなやりたいことがあったら言って!」と、<u>友達の意見を求める姿勢に変わっていった。</u>また、「つむつむ、楽しい!」と、<u>C児が声に出して楽しさを表現する姿が見られた。</u>(③④⑥⑨)</p>	<ul style="list-style-type: none">• あらかじめ、遊戯室に箱や段ボールを並べておき、期待感や興味関心がもてるようにする。• 遊びの一つとして取り組むことができるように、楽しい雰囲気をつくる。また、いくつかのルールのみ確認してから取り組み始めることで、幼児が主体的に参加できるようにする。• 幼児同士で自然に会話が始まったタイミングを見逃さず、教師は、「箱の大きさがみんな違うね。」「どの向きがいいのかな?」等、ヒントとなる声かけをすることで、幼児同士の伝え合いが増えるようにする。• 教師が必ず近くに位置し、安全に遊ぶことができるように配慮する。また、幼児が危険を察知できるように必要な時には早めに声をかける。• 優しい気持ちを認めたり、助けてもらってうれしい気持ちを教師が言葉にしたりすることで、チームの仲間意識が高まるようにする。• <u>C児</u>が友達の意見を求める姿を認め、みんなで協力する意識が高まるようにする。	<ul style="list-style-type: none">• 興味をひく環境構成の大切さを改めて感じた。箱や段ボールの形状はさまざまな物を用意したためより効果的であった。• 教師から多くを伝えすぎず、遊びの一つとして取り組んでみるのが幼児の楽しさや、友達と協力する気持ちにつながった。• 5、6人が1チームであるため、考えを伝えやすい人数であった。• 幼児同士で椅子を支え、教師が近くに位置したが、危険な様子も見られたため、道具を見直す必要性を感じた。• <u>C児</u>は自分の考えを強く主張しながら箱を積み上げていたが、友達に椅子を支えてもらい、相手から大切にしてもらった経験をしたことで、表情が和らぎ、友達の気持ちを聞こうとする発言が多くなっていった。

9月下旬

「あれ、うまくいかない！」

幼児の姿（10の姿）	援助・環境構成	教師の気づき
<p>9月21日 競技練習</p> <p>初めて園庭で“つむつむタワー”を行う。ドキドキする様子や、楽しみにする姿が見られる。(①②)</p> <p>実際に積み上げてみると、風が吹きタワーが揺れる。また、C児のいるピンクチームは、幼児同士の声かけが少なく、なかなかタワーが積み上がっていかずに負けてしまう。(③⑥)</p> <p>競技の練習後、作戦の考え直しや箱の修理をチームにわかれて行う。C児は負けたことに腹を立てている様子で、ほとんど言葉を発しない。(③⑥⑨)</p> <p>F児が「箱をたくさんくっつけようよ。」と言うと、C児が怒った口調で「それだけじゃないんよ！」と言う。教師は、「落ち着いてゆっくり話してみて。その方がみんなにCくんの気持ちが伝わるよ。」と声をかける。C児は少し落ち着いた口調で、「勝手にやっちゃダメだと思った。どうやって積むかもう一回みんなで考えんといけん。」と言う。するとE児が「そうだよね。もう一回考え直そう?」、F児が</p>	<ul style="list-style-type: none">・教師も楽しみにしている気持ちを伝え、期待感や意欲が高まるようにする。・幼児同士で声をかけ合えるように、教師が手本となってさまざまな声かけをする。・二つのチームの頑張りを認め、自信がもてるようにする。・二つのチームが少し離れた場所で落ち着いて活動できるように場をつくる。・C児が自分の気持ちを伝えるきっかけを探しながら、様子を見守る。また、ヒントとなる声かけをする。・教師は、「もっと高く積んだり、友達と協力したりするためにはどうすればいいんだろう？」と投げかけ、幼児同士の話し合いを見守る。・気持ちが伝わるためにはどんな話し方をすればよいかアドバイスし、C児が落ち着いて話ができるようにする。また、周りの幼児もC児の気持ちを聞いて自分の思いを伝えていけるように関わる。・C児が自分の気持ちを素直に話せたことを認める。	<ul style="list-style-type: none">・話し合いや事前の活動を経験したため、活動を楽しみにしたり、意欲をもって取り組んだりする姿が多く見られた。・声かけを減らし、幼児同士で話ができるように見守ったが、幼児の普段の伝え合いの仕方から、教師の声かけの頻度を調整する必要性を感じた。・これまでもC児の気持ちに周りの幼児が沿っていく場面が多く見られたが、C児が優しい口調で話ができると、周りの幼児もうれしそうにしていることが多い。・C児は強い口調で自分の気持ちを伝えようとする姿が多い。穏やかに話ができたと成功体験を重ねる必要がある。また、自分の気持ちを受け入れてもらえ

<p>「積む順番をもう一回考えよう。」 と言う。<u>C児は友達が自分の気持ちを受け入れてくれたことで笑顔になりうれしそうであった。</u> (③④⑨)</p>	<p>・友達が共感してくれたことを教師も一緒に喜び、C児自身が周りから大切にされている感覚をもつことができるようにする。</p>	<p>なかったという経験も、C児にとっては自分自身を振り返るきっかけになるのではないかと考える。</p>
--	--	--

<考察>

- ・教師が見通しをもって運動会に向かう活動を構成し、段階を追って取り組んでいくことで、幼児の期待感や意欲が増した。そのため、幼児同士の話し合いや気持ちの伝え合いも多くなり、さまざまな人の気持ちや考えを知る経験を重ねることができた。
- ・友達の気持ちに寄り添う姿を今後も認めていきたい。また、友達と違う考えや気持ちであっても、集いの場で素直に話をする姿を認めたり、安心して発言できるような雰囲気づくりをしたりすることが必要であると考え。
- ・今回の意図的な活動の中でC児は、自分自身が友達から大切にされていることを実感する場面が多く見られた。普段の生活や好きな遊びでは、強い口調で友達に接することはまだまだ多くあるが、C児が友達を大切にする姿を認めたり、教師と一緒に振り返ったりすることを積み重ね、自他を大切にできるように支えていきたい。

X 成果と課題

1 成果

(1) 「集いの場の教師の援助の在り方や環境構成を追究する」について

- ・3歳児は、初めての集団生活であることから、友達との関わり方に個人差があり、困り感をもつ幼児もいた。教師は、互いの気持ちを知る機会をつくるために時間を保障し仲立ちすることで、教師自身も今まで気づいていなかった幼児の気持ちに気づき援助することができた。また、気持ちですれ違う瞬間を見逃さずに教師が丁寧に関わっていくことで、主題の受けとめに掲げた「友達と過ごすことに心地よさやうれしさを感じる幼児」に近づいた。
- ・5歳児は、これまでの経験から自分達で遊びを進めていこうとする姿勢が見られていた。遊びの中で困ったことがあっても声をかけ合って集まり、自分達で解決しようとする中で、主題の受けとめに掲げた「気持ちや考えを伝え合える幼児」「共通の目的の実現に向かって友達と一緒に取り組もうとする幼児」に近づいた。また、幼児が自ら行動しようとする姿勢は今まで積み重ねてきた話し合いによる成功体験が基となっていると考える。また、自分達で話し合いを進めていこうとするため、教師は見守ったり、簡潔にアドバイスをしたりする援助が重要であるとわかった。この事例をきっかけに、自分達で話し合いをすることが定着してきた5歳児に対して、話し合っている姿を認めていくことの重要性も改めて気づかされた。話し合いの結果、解決しなかったとしても、幼児同士が気持ちを聞き合ったり、互いのことを思いやったりする場を大事にし、認めていくことで、主題の受けとめに掲げた「互いのよさに気づき、認め合える幼児」に近づいた。
- ・日々の会話の中から、幼児の興味関心を捉え環境を構成していくことで遊びの充実につながった。また、友達の遊びを教師が知らせることでクラス全体に遊びへの興味が広がり、「共通の目的の実現に向かって友達と一緒に取り組もうとする幼児」に近づくためのきっかけづくりをすることができた。

- ・行事へ向けての取り組みでは、教師が見通しをもって活動を構成、計画し、段階を追って取り組んでいくことで、幼児の期待感や意欲が増した。活動の中で幼児同士の話し合いや気持ちの伝え合いも多くなり、さまざまな人の気持ちや考えを知る経験を重ねることで「気持ちや考えを伝え合える幼児」「共通の目的の実現に向かって友達と一緒に取り組もうとする幼児」に近づいた。また、話し合いの場面が増えてくると発言の多い幼児と、そうでない幼児の姿が見られるようになった。そのため、教師は友達と違う考えや気持ちであっても、素直に話をする姿を認めたり、安心して発言できるような雰囲気づくりをしたりすることが重要であると考えている。

(2) 訪問指導や実践発表会から

- ・幼児の行動や発言に対して、教師がその場その都度、認めたり褒めたりすることで自己肯定感や自己有用感が高まる場面が見られた。教師が言葉にして幼児の言動を価値づけていくことが大切であると感じた。
- ・遊びの中で自然に異年齢の交流ができ、年少児は相手を意識したり親しむ気持ちをもったりすることにつながった。年長児は年少児が理解できるように言葉を選びながら関わることで、思いやりの気持ちや自己有用感をもつきっかけとなった。
- ・遊びの中で起こったトラブルや課題に対して、教師が話し合いのできる場や時間を保障したり、言葉を選びながら仲立ちしたりすることにより、幼児が自分達で折り合いをつけながら遊びを進めていく姿につながった。
- ・教師はトラブルの解決を急がず、解決の目的を見定めながら関わるということが重要であることを実感した。

(3) 研究と合わせて行った取り組みから

- ・行事前後の保護者からのメッセージカードを幼児がとても喜び、保護者から見守られているという安心感につながった。また、たくさんの保護者から認められたことで自己肯定感の高まりにつながった。
- ・1学期、2学期と保護者の意識調査や園評価アンケートを実施したことで、各家庭で大切にしていることが理解でき、園と家庭が共に子育てに向き合うことができた。
- ・講師を招いての職員研修では、体験を通しての話を聴くことができ、「知ることの大切さ」や「人と人とのつながりの大切さ」ど、再確認する機会となった。

2 成果を踏まえての課題

- ・年度当初は研究を意識するあまり、幼児同士をつなげようと教師の遊びへの介入や声かけが多くなっていった。幼児と一緒に環境を構成したり、教師の言葉を精選したりし、幼児の姿を多面的に捉えながら保育をしていくことが必要である。
- ・集いの場で気持ちや考えを伝えることに時間を要する幼児に対して、温かな見守りや、場と時間の調整が必要であった。教師や友達との信頼関係を基盤に、安心して気持ちを伝えることのできる仲間づくりを今後も行っていきたい。
- ・少人数であったり、学年の人数にばらつきがあったりする中で、異年齢の交流をもつことは改めて重要であることがわかった。次年度は定期的な異年齢の交流や他園との交流活動を通して、これまで以上に幼児の仲間づくりを支えていきたい。
- ・帰りの会での遊びの振り返りに関して、各学年の発達段階に合った進め方を考え、学期や幼児の姿に合わせて見直しを行う必要性を感じた。また、幼児の発言を促すような援助や雰囲気づくりも考えていきたい。
- ・次年度は、年長児の在籍がなく、年中児と年少児での生活となる予定である。発達段階を見極めながら、職員間で一人一人を共通理解し保育を行っていきたい。